

井藤希 令和3年5月度特別作品

日浦山・岩瀧山春景 井藤希

家の近くに二つの小ぶりを山が並んでいる。標高三百五十メートル弱の日浦山と二百メートル弱の岩瀧山である。山麓には学校や古い寺社が点在し、日浦山には南北朝時代に南朝方の城があったという。中腹は岩や木立が多くまた、短いが変化に富んだ登山道を上ってゆくと広島市内や広島湾が一望できる場所があるなど、歩くのがまことに面白い山である。

日々暖かくなるこの季節に山中を歩いていると、木々の芽吹や鳥たちの声が確かな春を感じさせてくれ、うれしい気分になる。

春の山電車の音の届きたる

岨道をやうやう登り春の風

蝶々の近づいてゆく天狗岩

草萌ゆる南北朝の城の跡

街騒の遠く聞こゆる春の山

春望や海に架かれる橋あまた

岩瀧の社へと飛ぶ桜かな

山道を下る木立に囁りぬ

うららかなや山を下りて薬師寺へ

ひと雲の春天に飛ぶ日浦山

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

「日浦山・岩瀧山春景」は、作者が春の山を歩きながら句を詠まれている様子が瞭に浮かぶような作品集です。近隣の山が歴史の中で重要な所であったことも、その親しみと楽しみを一層深めていることが伝わってきます。

岨道をやうやう登り春の風

険しい山道を登り終え、眺望も開けた。少し疲れた体に、春の風が一段と気持ちよく吹き抜ける。爽やかな一句である。

山道を下る木立に囁りぬ

下りは自然に足が早くなる。囁りが聞こえて思わず立ち止まり、囁りの聞こえてきた木立に鳥の姿を探す。鳥の音が聞こえるようだ。

ひと雲の春天に飛ぶ日浦山

山頂に来て見上げれば、明るい空に雲が飛ぶように流れている。山の名前を置くことで、作者の山への愛着と今日の山登りの楽しさがよく伝わってくる。「春天」の季語が光っている。

俳句との出会い 大橋博子

忙しい月日が終り、しきりに手を洗う自分に気がついたら、外に出て話してみよう、寄り添ってみよう、そんなことを思った頃でした。声を掛けていたのが俳句です。それも一年くらいで止めたのですが、あらためて出掛けて行き、佐保先生の生徒になりました。川辺、小高い山を一応、俳句気分です歩いておりましたが、もの捉え方は一筋縄ではいかないようです。自分らしく、自分のものになるまでにはと思っております。

花こぶし石のベンチに影やはし

春時雨ピロードのごと苔むして

玄関に能面かかげ風信子

春の雲堤の石は椅子となり

ふいの音させ春林の鳥立てり

春の風自転車で行くゴッホ展

服を干す竿の先には夏の雲

走り根を踏んで上りぬ青景風

雲の峰石堀つづく港町

敬老の日いちちようらいを着て行きぬ

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

「俳句との出会い」は、これまでの作者の句の中から、自分らしさを大切にして選ばれたものと拝見しました。川辺や山を歩いて鳥の音に驚いたり、自転車で乗ったりする作者の楽しそうな様子が目に浮かび、その喜びが作品集からあふれ出ているようです。

春の風自転車で行くゴッホ展

ゴッホの描く明るい緑色の風景の中を、作者が自転車を漕いでいる姿を想像した。展覧会を楽しみにしている気持ちが伝わってくる。服を干す竿の先には夏の雲

洗い物を干しているとその向こうに大きな雲が見える。何気ない暮らしを句にして、季語「夏の雲」が生きて生きている。

敬老の日いちちようらいを着て行きぬ

「いちちようらい」という飾らない言葉が、敬老の日を単なる行事ではなく、作者が主体となった鮮やかな一日にした。